

〔研究報告〕

中山間地域における高齢者の住み慣れた地域での生活を継続する看護の検討

宗宮 真理子¹⁾ 松下 光子²⁾

**Consideration of Nursing that Allows Older Adult Residents of Hilled Rural Areas
to Continue Living in Their Accustomed Environment**

Mariko Somiya¹⁾ and Mitsuko Matsushita²⁾

要旨

本研究の目的は、診療所を利用している高齢患者への看護活動と診療所看護師の看護活動の観察結果から、中山間地域において高齢者が住み慣れた地域での生活を継続するための看護を明らかにすることである。

中山間地域に位置するA町B地域のC診療所を利用している2組の夫婦(4名)を受け持ち、看護を行う中で、4名全員が住み慣れたB地域で生活を継続したいという思いを確認した。その思いを踏まえて看護計画を立案した。それらの看護計画に基づいて実施した看護活動は、《患者の心身の健康維持・増進》《患者・家族の生活状況・思いの把握》《患者・家族の生活に合わせた支援》《患者・家族の楽しみや思いを踏まえた支援》《地域住民間のかかわり継続・増強》《患者や家族との関係性構築》《家族介護者の介護負担の軽減》であった。

C診療所に勤務する看護師3名を対象に看護活動を観察し意図を確認した結果、上記の看護活動以外に《患者の安楽への支援》《意思決定支援》《多職種での連携・協働》《少ない資源の効果的・効率的な活用》《確実な診療の補助》に整理された。

中山間地域において高齢者が住み慣れた場での生活を継続するには、【限られた医療を前提とした心身の健康の維持・増進を図る看護】【今の生活を継続するため、生活や思いを反映させた看護】【家族や地域住民の支え合いや地域全体を視野に入れた看護】【地域の特徴や現在の体調を踏まえた意思決定を支援する看護】【長期的なかかわりを前提として患者や家族との関係性を構築する看護】【少ない資源を活用した効果的・効率的な看護】の6つの看護を実践する必要がある。そしてこういった看護を展開するには地域住民を巻き込むことで、これらの看護を通して中山間地域に住む高齢者が住み慣れた場で地域住民とのかかわりを持ち、楽しみや生きがいをもった生活が可能となる。

キーワード：中山間地域、高齢者、住み慣れた地域、生活継続、看護

I. 研究目的

国の政策(厚生労働省, 2013)として高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもと、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう地域包括ケアが進められている。地理的、社

会的、経済的条件は恵まれず、過疎化、高齢化が進行し集落機能が低下している中山間地域においては、物理的、人的な資源が少なく、中山間地域の実情に応じた地域包括ケアシステムの構築が求められている。

人口が1,000人程度、高齢化率が45.4%(2014年12

1) 岐阜県立看護大学 機能看護学領域 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Research and Collaboration Center, Gifu College of Nursing

月現在)であり、中山間地域とされるA町B地域に住む高齢の住民は、ふれあいいきいきサロンやゲートボールの集まりに参加したり、近隣の住民同士で支えあい、共同で野菜を育てるなどしながら生活している。A町B地域に住む住民の多くは、最期まで地域での生活を継続したいと考えており、先行研究においても中山間地域において高齢者が住み慣れた地域での生活を継続したいと考えていることが明らかになっている(川崎ら, 2017; 吉野ら, 1999)。B地域に所在するC診療所はへき地診療所として設置されており、B地域を対象とした地域ケア会議はC診療所看護師が中心となって開催している。地域ケア会議には、A町の保健師、地域包括支援センター職員、B地域の駐在所に勤務する警察官、民生委員等が参加する。B地域にC診療所以外に医療機関はなく、C診療所は機能強化型在宅療養支援診療所の算定を行っている。さらにC診療所には介護老人保健施設、居宅介護支援事業所等が併設されている。地域包括ケアシステムの、可能な限り住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることを支援する目的と同じ方向を向いて、C診療所の看護師は患者や併設施設利用者(以下利用者とする)の地域での生活を継続したいという思いに応えるため外来業務だけでなく、冬季には積雪による生活への影響を鑑み、患者が安全に生活できるよう介護老人保健施設への一時入所を提案するなど併設施設の機能を活用したり、訪問看護等幅広く看護を展開している。また、多施設・多職種連携を実践しながら、多様な活動を通して高齢者が住み慣れたB地域で最期を迎えられるよう支援している。C診療所は、地域ケア会議を主として進めたり、多機能の施設が一体となって多職種連携を図っていることなどから、C診療所が地域包括ケアの中核を担っていると捉えることが可能である。

中山間地域は、他の地域と比較すると早い段階で、少子高齢化から人口減少化へと変化していく。少子高齢化・人口減少化をけん引していく中山間地域において、高齢者が住み慣れた地域での生活を継続するための看護を明らかにすることは、今後他の地域でも起こりうる状況のため、参考となると考えられる。

本研究の目的は、診療所を利用している高齢患者の事例を通じた看護活動と、診療所看護師の看護活動の観察結果から、中山間地域において高齢者が住み慣れた地域での生活を継続するための看護を明らかにすることである。

なお、筆頭筆者は岐阜県立看護大学大学院生として研修生という立場で看護を実践した。筆頭筆者は看護師と保健師の資格を持ち、これまで急性期病院での看護実践経験がある。

II. 方法

C診療所の看護活動の全体を確認するために2つの方法をとった。1つは、個別事例により看護活動を深く確認できるよう高齢患者の事例に対する看護活動を行った。もう1つは、高齢者以外の世代を対象とした看護や集団を対象とした看護、管理面も含めて診療所看護の全体を広く見て確認するため診療所看護師の看護活動の観察を行った。

1. 事例への看護活動の明確化

1) 研究対象および受け持ち期間

C診療所の患者のうち、診療所の看護師に研究目的や方法を説明した上で、以前からB地域で生活を営んでおり今後も継続して生活をしていきたいと思っている診療所患者を紹介してほしい旨を伝えて紹介を受けた。紹介のあった者のうち、研究協力に同意が得られた2組の夫婦(4名)を対象として受け持ち、夫婦を1つの単位と捉えて看護計画を立案し看護を実施した。受け持ち期間は2013年1月～2014年3月であった。

2) データ収集方法

家庭訪問、診療所受診時に看護を実施した。診療録および対象とのコミュニケーションを通して患者の身体的状況、生活状況、家族背景、患者の思いや希望、これまでの生活歴を収集した。それらをもとに看護計画を立案した。立案した看護計画に基づいて実施した看護および看護実施時の患者の反応を表に記載し、一連の過程が分かるよう記録に残した。収集したデータをできるだけ忠実に記録に残せるよう、かかわった直後に記録した。また筆頭筆者が不在の際の看護については、診療録および診療所看護師への聞き取りから、対象の身体および精神状況、社会的な背景、診療所看護師等の患者への看護とそのときの患者の反応をデータとして収集した。

3) 分析方法

収集したデータの一覧を熟読し、実施した看護の活動とその意図を一つの単位として区切った。実施した看護活動を意図とともに抽象化し、端的に表現した。端的に表現した看護活動の意図を意味内容ごとに分類整理した。実施し

た看護活動の分析は、質的研究の経験が豊富なスーパーバイザーとの検討を行った。

2. 診療所看護師の看護活動の明確化

1) 対象および期間・日程

C診療所で看護を実践する看護師のうち、当該診療所での勤務経験年数が長く、経験の豊富な看護師3名に協力依頼した。主に外来業務を担当する看護師、看護管理者を兼務する看護師、介護支援専門員を兼務している看護師、を選定した。役割が異なる3人の看護師を各1日観察することで診療所看護の実態が把握できると判断したためである。対象となる看護師と相談し業務の妨げにならない、かつ、特殊な業務のない日を選定したうえで日程を挙げてもらい、対象が指定する日に各1日実施した。看護師の行動の観察は2014年2月～9月に実施した。

2) データ収集方法

朝の管理申し送りから勤務終了まで診療所看護師に付き添い、外来診療の介助や検査・処置、訪問看護など診療所内外を問わず診療所看護師の看護活動を観察した。その都度看護師にその活動の意図を確認した。確認する際にはオープンクエスチョンで尋ね、回答が得られない時には「このような意図で行ったのか」と確認を重ね、全ての意図を確認した。観察した内容と看護師に確認した意図をメモにとり、それらをデータとした。

3) 分析方法

観察した内容と看護師に確認した意図を、まずは観察した場面ごとに分け、その後、聞きとった意図ごとに観察した看護活動の内容を区切った。聞き取った意図は観察した看護活動とともに意味を損なわないよう表現した。表現した意図を意味内容が類似したもので分類整理した。分析の際には、質的研究の経験が豊富なスーパーバイザーと検討し、分析結果の確認を研究協力者に依頼した。

3. 倫理的配慮

C診療所施設長に文書および口頭にて調査依頼を行い、承諾書への署名を得た。研究協力者となる患者および診療所看護師に、研究目的や方法、協力しなくとも不利益は被らないこと、研究協力に一度同意した後も中断することができ、中断によっても一切不利益は生じないこと、研究成果の公表にあたり匿名性を守ることなどを文書および口頭にて説明し、自由意思により同意を得た。

なお、本研究は岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論

文倫理審査部会の承認（承認番号25-A007M-2 2013年6月）を得て実施した。

III. 結果

1. 受け持ち事例への看護活動の明確化

受け持った患者は、D氏E氏夫妻およびF氏G氏夫妻の4名である。以下、看護診断名を「」で示す。

1) 事例概要

(1) 事例D、E氏

ともに80歳代であるD氏とE氏は、日中は高齢夫婦のみの世帯であった。認知症であるD氏を、糖尿病等を抱えた妻のE氏が介護していた。D氏は要介護認定を受けており、定期的にショートステイを利用していた。近隣住民とは仲が良かった。夫婦ともにこの地区で生まれ育っており、D氏とE氏は、自宅での生活継続を希望していた。E氏は介護を負担に感じていた。またD氏は自宅で午睡を含め1日15時間睡眠をとり、夕方になると活発に活動していた。これらからD氏に対して「睡眠・活動リズムパターンの変調」、E氏に対して「介護負担と身体の不調によるジレンマに関連した悲嘆」の2つの看護診断を行い、D氏の昼夜のリズムを整えるために日中に刺激する、E氏のセルフケアの促進や介護負担の軽減への取り組みなどの看護計画を立案した。

受け持ち開始から数か月後、E氏が体調不良となり介護が不可能になったことで、D氏はグループホームに入所した。入所時にD氏はグループホームで落ち着けずいたことで、E氏は入所に対する罪の意識を感じていた。D氏の直接の思いは確認できなかったが、D氏は自宅にいたいという思いを持っているとE氏は考えており、そのため入所についてかわいそうだと感じていた。そのことから上記の2つに加え、D氏とE氏二人に対して「2人にとって新たな生活を構築する準備の状態」という看護診断を行い、D氏が入所中も自宅に外泊できるように調整する、E氏は趣味の畑仕事を行うことができるよう現在の身体状況を説明する、などの看護計画を立案した。

グループホーム入所後、D氏の入所する施設として最初にE氏が希望していた特別養護老人ホームに空きができたため、D氏が入所することになった。入所時にD氏は心肺停止の状態になり、総合病院に入院したがその後退院し再入所となったため、「介護負担と身体の不調によるジレン

マに関連した悲嘆」を終了した。このころからE氏の早く死にたいという発言が増えていた。「2人にとって新たな生活を築く準備状態」の看護計画を見直し、D氏は特別養護老人ホームでの新たな生活を、E氏がD氏の特別養護老人ホーム入所への罪悪感なく新たな生活に目を向けられるように目的を設定した。施設訪問しD氏の様子を確認したりE氏の生活状況や生活への希望を反映させた看護計画を立案した。

(2) 事例F、G氏

夫であるF氏と妻のG氏はともに80歳代の夫婦であった。F氏はこの地域で生まれ育っており、G氏は同じA町の近隣地域で生まれ育ち、F氏との結婚を機にB地域で暮らし始めていた。夫婦ともに近隣住民との仲が良好であり、近隣住民と助け合いながら生活していた。二人が住む地区はB地域の中心地からさらに車で20分程度のところに位置していた。近所には公民館と体育館があり、近隣住民とともにふれあいいきいきサロンやソフトバレー、グランドゴルフ等スポーツを楽しんでおり、F氏はこの家での生活を継続したいという思いを持っていた。G氏は自身の思いを口にすることはないが、いつもF氏のそばにおりF氏が移動するといっしょに移動していた。G氏は認知症であり、認知症の進行に伴い家事をしなくなった。尿失禁も増えていた。夫婦ともに介護保険の認定は受けていなかった。F氏は家事・農業をしながらG氏の介護を行っていた。F氏は50歳代から高血圧症であり、毎朝降圧剤を3種類内服していた。以上の事から、F氏に対して「血圧コントロールが必要な状態」、G氏に対して「活動耐性低下」、二人に対して「清潔で安心できる生活環境を整備する必要がある状態」と診断し、F氏にはセルフケアを促進する、G氏は活動量増加のための趣味の提案、3時間ごとのG氏の排泄誘導など看護計画に沿って援助を行った。

その後、G氏が急性心筋梗塞のため逝去し、F氏は一人での生活を送っていた。逝去直後、筆者が自宅訪問した際にはF氏は表情が乏しく、声に力もなかった。F氏は今後も現在の住居に住み続けたいと考えていた。今後も自宅に住み続けるためには、G氏を喪った喪失感を感じながらも精神状態を維持し血圧をコントロールする必要がある。これらから「血圧コントロールが必要な状態」を「新たな生活環境への適応準備状態」と診断名を変更し、精神的ケアについての看護計画を追加した。

G氏の逝去数ヶ月後F氏の思いを確認した。F氏は冬季になると近隣住民の集まりが減ることをさみしく感じていた。また近隣住民とのかかわりを持ちながらこの土地での生活を継続したいと考えていたため、「新たな生活環境への適応準備状態」に、近隣住民とのかかわりを維持するよう看護計画を追加した。

2) 事例に対し実施した看護活動

事例の中で実施した看護活動を分類整理したものを表1に示す。以下分類名を《 》、実施した看護活動を『 』で示す。

事例で実施した看護活動を分類整理した結果、《患者の心身の健康維持・増進》《患者・家族の生活状況・思いの把握》《患者・家族の生活に合わせた支援》《患者・家族の楽しみや思いを踏まえた支援》《地域住民間のかかわり継続・増強》《患者や家族との関係性構築》《家族介護者の介護負担の軽減》の7項目に整理された。以下、項目ごとに説明する。

《患者の心身の健康維持・増進》は、E氏による低血糖症状の訴えに対して『セルフケアに向けて症状出現時の血糖測定の提案』や、F氏に『高血圧の原因探求のため食事内容やストレスに関する確認』、『セルフケアに向けて血圧コントロールの必要性や方法の説明』、G氏逝去の3か月後にF氏に対し『グリーンケアとして語る会の開催』をしたことなどであった。

《患者・家族の生活状況・思いの把握》は、D氏がグループホーム入所後に自宅に外泊した際、E氏に『外泊時の状況と思いを把握するためD氏の外泊の状況とそのときのE氏の思いの確認』をしたことなどであった。

《患者・家族の生活に合わせた支援》は、E氏の夕方の散歩後に低血糖症状が出現するという発言から『セルフケアを生活に組み込むため、散歩後の血糖測定の提案』を行ったことや、F氏が普段利用する公民館に血圧計が置いてあることから『生活にセルフケアを取り入れるため血圧測定場所の提案』をしたことなどであった。

《患者・家族の楽しみや思いを踏まえた支援》は、D氏が『自宅に近い環境で安寧に過ごせるようショートステイ時にノンアルコールビールや財布の持参を家族に提案』したことや、E氏の隣県に住む次男宅を訪問したいという思いを踏まえ、交通手段や移動時間、家族の受け入れ態勢を確認し身体的に移動は問題ないことを判断したうえで医師

と協働し、E氏が信頼している医師から身体状況と移動して問題ないことを説明してもらうことでE氏は安心して次男に会いに行くことができたという『思いを踏まえ、次男宅訪問を勧奨』したことなどであった。

《地域住民間のかかわり継続・増強》は、E氏は他者とのかかわりが持てるよう通所サービスの活用を希望していたが介護認定されることは困難であるため『他者とのかかわりを持つという希望を踏まえ地域活動参加を提案』したことや、F氏は近隣住民とこれまで以上にかかわりたいがその方法や内容に悩んでいたことから、『地域住民とのかかわりを増やしたい思いを叶えるため、自身の体験などを近隣住民と共有する提案』をしたことなどであった。

《患者や家族との関係性構築》は、E氏が流涙しながら介護に対する思いを話した際に話を傾聴し『つらい思いを受け止め、いつでも話を聞くことを伝えた』ことであった。

《家族介護者の介護負担の軽減》は、『介護に対する負担軽減のため話を傾聴』や、『介護負担軽減のためショートステイ利用の提案』などであった。

2. 診療所看護師の看護活動の明確化

C診療所の看護活動には兼務の看護師を含め5名の看護師が携わっていた。看護活動を観察した対象者はX、Y、Z看護師であった。X看護師はC診療所での経験年数は10年であり、診療所専従であった。Y看護師のC診療所での経験年数は28年で、看護・介護職の管理者であった。Z

表1 受け持ち事例への看護活動

分類	実施した看護活動
患者の心身の健康維持・増進	覚醒を促すため朝の訪問と声かけ 生活リズムを整えるため朝早めに起こすことを提案 生活リズムを整えるため睡眠導入剤の使用の提案 生活リズムを整えるため睡眠導入剤の効果の説明 生活リズムを整えるため朝に起こすことの提案 セルフケアに向けて症状出現時の血糖測定の提案 セルフケアに向けて受診時に血糖一覧表を持参するよう提案 歩行状態の観察 身体状況を把握するため眼科の受診結果の確認 身体状況を把握するため心身の状況の確認 体調確認のための問いかけ 高血圧の原因探求のため食事内容やストレスに関する確認 セルフケアに向けて血圧コントロールの必要性や方法の説明 セルフケアに向けて自己血圧測定を提案 グリーンケアとして語る会の開催 グリーンケアのため話を傾聴し、夫婦の写真の贈呈 血圧コントロールのため血圧測定と内服状況の確認
患者・家族の生活状況・思いの把握	外泊時の状況と思いを把握するためD氏の外泊の状況とそのときのE氏の思いの確認 入所時の生活状況を把握するため施設のスタッフに確認 E氏にD氏の入所に関する思いを把握するため傾聴 普段の過ごし方の確認
患者・家族の生活に合わせた支援	無理なく普段の生活の中で昼夜のリズムを整えられるよう日課の散歩等を活用し刺激を与えることの提案 セルフケアを生活に組み込むため、散歩後の血糖測定の提案 生活にセルフケアを取り入れるため血圧測定の場所の提案
患者・家族の楽しみや思いを踏まえた支援	思いを踏まえてケアができるよう診療所医師に報告 趣味を継続できるように医師と今後畑仕事ができることを説明 自宅に近い環境で安寧に過ごせるようショートステイ時にノンアルコールビールや財布の持参を家族に提案 楽しみを確認するための問いかけ 趣味の畑仕事が続けられるよう声掛け D氏担当の介護支援専門員とE氏の今後の生活について検討 思いを踏まえ、次男宅訪問を勧奨 医師に身体的に移動は問題ないことを伝えるよう依頼 楽しみながら活動量を増やせるようこれまでの趣味を確認 楽しく認知症進行予防ができるよう手先を使う趣味の提案
地域住民間のかかわり継続・増強	他者とのかかわりを持つという希望を踏まえ地域活動参加を提案 地域住民とのかかわりを継続したい思いを叶えるため、近隣住民とのかかわり継続の支援 地域住民とのかかわりを増やしたい思いを叶えるため、自身の体験などを近隣住民と共有する提案
患者や家族との関係性構築	つらい思いを受け止め、いつでも話を聞くことを伝えた
家族介護者の介護負担の軽減	精神的ケアのためD氏の入所生活状況をE氏に報告 介護負担軽減のため二人の普段の生活や介護状況について確認 介護負担軽減のため介護に関する二人の思いの確認 介護に対する負担軽減のため話を傾聴 介護負担軽減のため通所サービスの利用を介護支援専門員と検討 介護負担を分散するため訪問者を増やせないかと提案 介護負担軽減のためE氏の介護に対する思いを傾聴 介護負担の程度を確認するため今後も介護を継続できそうか確認 介護負担軽減のためショートステイ利用の提案

看護師のC診療所での経験年数は25年で、C診療所に併設する居宅介護支援事業所で介護支援専門員を兼務していた。3名ともにC診療所が所在するA町に在住していた。

観察した場面は、勤務開始前の業務、診療所管理に関する申し送り、外来診察介助、検査の介助、創傷処置、カンファレンス、往診・訪問診療への同行、診療時間外の対応、調剤、患者の情報収集と共有、往診中のスタッフからの連絡対応、多職種との検討、待合室での患者・家族との会話、スタッフからの相談対応、施設利用者との面談などであった。今回の観察では、母子や小児、成人の外来受診等がなく、看護の対象となったのは全て高齢者であった。

以下、診療所看護師の看護活動を「」、小分類を〔 〕、分類を《 》で示し、分類ごとに説明する。()は件数を示す。看護活動を分類整理したものを表2に示す。

《患者の心身の健康維持・増進(23)》は、〔身体状況や生活環境から受診の必要性を判断する(1)〕〔診察時患者の身体状況を把握する(5)〕〔患者の今後の経過を予測し情報収集する(2)〕〔研修生の実習指導を通し患者の身体状況を確認する(2)〕〔安全で確実な内服を促す(8)〕〔患者や利用者への精神的ケアを行う(2)〕〔患者の損傷を予防し安全に受診できる環境を整える(3)〕の小分類が含まれた。〔身体状況や生活環境から受診の必要性を判断する〕は「診療時間外であっても同居や認知症であることを踏まえ、熱中症疑いの患者が受診できるよう調整する」という看護活動であった。〔診察時患者の身体状況を把握する〕は、「外来受診患者が診察を待っている間、最近の体調を確認するために患者の趣味の話を契機に情報収集する」「往診時爪を切りながら関節リウマチの状況を観察する」等の看護活動であった。〔患者の今後の経過を予測し情報収集する〕は、「看護師自身が近隣住民の一人であり、終末期の患者の急変時には自身が対応すると予測し情報収集のため訪問診療に同行する」等の看護活動であった。〔安全で確実な内服を促す〕は「通所リハビリテーションに通っている患者に確実な内服のため次の通所までの分の内服薬を渡す」等の看護活動であった。〔患者や利用者への精神的ケアを行う〕は「併設施設利用者の転帰や逝去を把握し、その友人であった別の利用者の精神的ケアのために声を掛ける」等の看護活動であった。〔患者の損傷を予防し安全に受診できる環境を整える〕は「診療時間外の診察・処置後、帰宅する手段がない患者が安全に帰宅できるよう自宅

に送り届ける」等の看護活動であった。

《患者・家族の生活状況・思いの把握(6)》には、〔家族介護者の思いを把握する(2)〕〔診察時患者と家族の状況を把握する(2)〕〔訪問診療時家族介護者の状況を把握する(1)〕〔施設利用者の状況を把握する(1)〕の小分類があった。〔診察時患者と家族の状況を把握する〕は「患者の爪の伸びから家族の帰省や介護状況を確認する必要性を感じたため、爪を切りながら家族について情報収集する」等の看護活動であった。〔施設利用者の状況を把握する〕は「併設施設利用者の情報を収集するため施設内をラウンドし利用者に声を掛ける」という看護活動であった。

《患者・家族の楽しみや思いを踏まえた支援(7)》は〔患者や家族の思い・希望を踏まえる(6)〕〔利用者の思いを反映した支援をする(1)〕の小分類があった。〔患者や家族の思い・希望を踏まえる〕は、認知症患者が今も運転したい思いを持っていることやこれまで仕事にも自動車の運転をしていたこと、自宅で生活するには自家用車が必須であることを把握したうえで、診療所を出発する際に運転状況を確認し、縁石に乗り上げそうになっているところを観察していたといった、「認知症患者の運転したい気持ちやこれまでの生活を踏まえ、どの程度運転できるのか確認し、今後の支援を検討するため帰り際に患者の運転状況を観察する」等の看護活動であった。

《地域住民間のかかわり継続(1)》は〔近隣住民と友人関係の継続を促す(1)〕の小分類があった。これは「デイケア利用者との面会時、その利用者の近隣に住んでおり友人関係にある利用者があえるよう時間を調整する」という看護活動であった。

《患者や家族との関係性構築(10)》は、〔時間外受診への申し訳なさを打ち消す(2)〕〔患者と関係を維持する(1)〕〔患者の満足感を満たす(3)〕〔患者・利用者の安心を促す(4)〕の小分類があった。〔時間外受診への申し訳なさを打ち消す〕は「閉院後の時間であることに申し訳なさを感じる患者が安心できるよう診療所を頼ってよいことを伝える」等の看護活動であった。〔患者と関係を維持する〕は「患者との関係性の維持のため、訪問診療時に終末期の患者宅に飾られていたこの地域特有の節分の飾りについて患者に話しかける」という看護活動であった。〔患者の満足感を満たす〕は「患者は話を聞いてほしいと思っ

等の看護活動であった。[患者・利用者の安心を促す]は「不安を感じている認知症患者が外来受診した際、安心するよう同郷の看護師を配置し、会話できるよう調整する」等の看護活動であった。

《家族介護者の介護負担の軽減(9)》は、[家族介護者の安心を促す(4)][家族介護者の意欲を維持する(1)][家族介護者の介護負担を軽減する(1)][家族介護者に介護者自身の体調管理を促す(2)][家族介護者の精神的ケアを行う(1)]の小分類があった。[家族介護者の介護負担を軽減する]は「家族の介護負担を軽減するため、外来診察後待合室にいる家族介護者に社会資源の活用に関する情報を提供し、不安を感じていないことを伝える」等の看護活動であった。

《患者の安楽への支援(6)》は、[終末期患者の苦痛を緩和し安楽を支援する(5)][利用者の自宅での安楽な生活を支援する(1)]の小分類があった。

《意思決定支援(8)》は、[今後の状態変化を見越して患者や家族介護者が必要時意思決定できるよう現在の患者の状況の理解を促進する(6)][積雪による生活の影響を踏まえ利用者の生活方法をともに検討する(1)][患者の意思決定を支援する(1)]の小分類が含まれた。[今後の状態変化を見越して患者や家族介護者が必要時意思決定できるよう現在の患者の状況の理解を促進する]は「訪問診療時終末期の家族介護者が患者の状況を把握できるよう診察への同席を提案する」等の看護活動があった。[積雪によ

表2 診療所看護師の看護活動

分類	小分類
患者の心身の健康維持・増進(23)	身体状況や生活環境から受診の必要性を判断する(1)
	診察時患者の身体状況を把握する(5)
	患者の今後の経過を予測し情報収集する(2)
	研修生の実習指導を通し患者の身体状況を確認する(2)
	安全で確実な内服を促す(8)
	患者や利用者への精神的ケアを行う(2)
患者・家族の生活状況・思いの把握(6)	患者の損傷を予防し安全に受診できる環境を整える(3)
	家族介護者の思いを把握する(2)
	診察時患者と家族の状況を把握する(2)
	訪問診療時家族介護者の状況を把握する(1)
患者・家族の楽しみや思いを踏まえた支援(7)	施設利用者の状況を把握する(1)
	患者や家族の思い・希望を踏まえる(6)
地域住民間のかかわり継続(1)	利用者の思いを反映した支援をする(1)
	近隣住民と友人関係の継続を促す(1)
患者や家族との関係性構築(10)	時間外受診への申し訳なきを打ち消す(2)
	患者と関係を維持する(1)
	患者の満足感を満たす(3)
	患者・利用者の安心を促す(4)
家族介護者の介護負担の軽減(9)	家族介護者の安心を促す(4)
	家族介護者の意欲を維持する(1)
	家族介護者の介護負担を軽減する(1)
	家族介護者に介護者自身の体調管理を促す(2)
患者の安楽への支援(6)	家族介護者の精神的ケアを行う(1)
	終末期患者の苦痛を緩和し安楽を支援する(5)
	利用者の自宅での安楽な生活を支援する(1)
意思決定支援(8)	今後の状態変化を見越して患者や家族介護者が必要時意思決定できるよう現在の患者の状況の理解を促進する(6)
	積雪による生活の影響を踏まえ利用者の生活方法をともに検討する(1)
	患者の意思決定を支援する(1)
多職種での連携・協働(12)	スタッフ間で管理や患者に関する状況を共有する(7)
	スタッフ間で役割を担う(2)
	多職種協働を図る(2)
少ない資源の効果的・効率的な活用(13)	研修生に患者や地域に関する理解を促す(1)
	患者の待ち時間を短縮し診療の効率化を図る(13)
確実な診療の補助(10)	医師の指示を遂行する(4)
	診察時医師が患者の身体状況を把握する支援を行う(3)
	必要な検査を実施する(3)

()は件数を示す

る生活の影響を踏まえ利用者の生活方法をともに検討する]は「要支援の利用者が豪雪地帯で冬季を安心して過ごせるよう生活方法について検討するため利用者の希望を確認する」という看護活動であった。

《多職種での連携・協働(12)》は、[スタッフ間で管理や患者に関する状況を共有する(7)][スタッフ間で役割を担う(2)][多職種協働を図る(2)][研修生に患者や地域に関する理解を促す(1)]の小分類があった。[スタッフ間で管理や患者に関する状況を共有する]は「診療所を含めた施設サービス利用者全員を把握するためカンファレンスに参加する」等の看護活動があった。[研修生に患者や地域に関する理解を促す]は「研修医が患者とコミュニケーションをとる支援として、患者が難聴であることや患者が話す方言を研修医に説明する」という看護活動であった。

《少ない資源の効果的・効率的な活用(13)》は、[患者の待ち時間を短縮し診療の効率化を図る(13)]の小分類があった。これは「外来診療時、患者が早く検査を受けられるよう診察状況から必要な検査を判断し準備を行う」等の看護活動があった。

《確実な診療の補助(10)》は[医師の指示を遂行する(4)][診察時医師が患者の身体状況を把握する支援を行う(3)][必要な検査を実施する(3)]の小分類が含まれた。

IV. 考察

1. 中山間地域に住む高齢者の住み慣れた地域での生活を継続するための看護

事例による看護活動は《患者の心身の健康維持・増進》《患者・家族の生活状況・思いの把握》《患者・家族の生活に合わせた支援》《患者・家族の楽しみや思いを踏まえた支援》《地域住民間のかかわり継続・増強》《患者や家族との関係性構築》《家族介護者の介護負担の軽減》の7項目であった。観察した診療所看護師の看護活動の《地域住民間のかかわり継続》が《地域住民間のかかわり継続・増強》に含まれると捉えると、《患者・家族の生活に合わせた支援》以外の6項目が、観察した診療所看護師の看護活動の内容と同じであると考えた。さらに観察した診療所看護師の看護活動には、《患者の安楽への支援》《意思決定支援》《多職種での連携・協働》《少ない資源の効果的・効率的な活用》《確実な診療の補助》があった。

《確実な診療の補助》は、看護師の看護活動の観察において[診察時医師が患者の身体状況を把握する支援を行う][必要な検査を実施する]等が行われていた。これらは、医師の診断や治療、検査が確実に実行されることを意図しており、それにより患者の健康の維持・増進につながると考えられたため、心身の健康の維持・増進を図る看護として捉えた。また、《患者の安楽への支援》も[終末期患者の苦痛を緩和し安楽を支援する]などにより患者が最期まで身体的な苦痛が緩和され痛みによる精神的苦痛も予防し住み慣れた地域での生活を継続できるよう支援することから心身の健康の維持・増進を図る看護として捉えた。これらは、入院可能な医療施設が近隣にないことから限られた医療資源の中で健康維持・増進を図る必要があることからなされていると考えられる。以上より、《患者の心身の健康維持・増進》《確実な診療の補助》《患者の安楽への支援》をまとめ、【限られた医療を前提とした心身の健康の維持・増進を図る看護】とした。

《患者や家族の生活状況や思いの把握》は、看護師の看護活動の観察において[診察時患者と家族の状況を把握する]等が行われていた。《患者・家族の楽しみや思いを踏まえた支援》は、事例において『楽しみながら活動量を増やせるようこれまでの趣味を確認』等が行われ《患者・家族の生活に合わせた支援》は、事例において『セルフケアを生活に組み込むため、散歩後の血糖測定の提案』等が行われていた。これらの看護活動は、中山間地域での今の生活を継続できるよう、生活や思いを把握して実施した看護活動であることから、【今の生活を継続するため、生活や思いを反映させた看護】であると考えた。

《地域住民間のかかわり継続・増強》は、事例において『他者とのかかわりを持つという希望を踏まえ地域活動参加の提案』等を行っていた。《家族介護者の介護負担の軽減》は、看護師の看護活動の観察において[家族介護者の介護負担を軽減する]等が行われていた。これらの看護活動の対象は患者だけでなく、患者を通して家族や地域住民、地域全体を含めていると考え、【家族や地域住民の支え合いや地域全体を視野に入れた看護】であると捉えた。

《意思決定支援》は、看護師の看護活動の観察において[積雪による生活の影響を踏まえ利用者の生活方法をともに検討する]等が行われていた。体調や積雪等の中山間地域特有の問題から住み慣れた地域での生活について患者や

家族が意思決定を迫られることもある。その際によりよい意思決定につながるよう看護活動を行っていたことから、【地域の特徴や現在の体調を踏まえた意思決定を支援する看護】であると考えた。

《患者や家族との関係性の構築》は、看護師の看護活動の観察において[患者の満足感を満たす]等が行われていた。関係性を構築するのは、看護を行う基盤であり、中山間地域に限ったことではないが、医療資源が乏しい中山間地域では長期的なかわりを持つことを前提としていた。継続的なかわりを通して患者の満足を得ていくことで関係性を構築しており、この関係性は中山間地域の特徴と考えたため【長期的なかわりを前提として患者や家族との関係性を構築する看護】であると考えた。

《少ない資源の効果的・効率的な活用》は、看護師の看護活動の観察において[患者の待ち時間を短縮し診療の効率化を図る]という看護活動が行われていた。《多職種連携・協働》は、看護師の看護活動の観察において[スタッフ間で管理や患者に関する状況を共有する]等が行われていた。これらの活動は人的資源も少ない中山間地域において、看護師間や多職種間で情報を共有し、効果的・効率的に看護を提供していると捉え、【少ない資源を活用した効果的・効率的な看護】であると考えた。

2. 中山間地域に住む高齢者の住み慣れた地域での生活を継続するための看護の特徴

1) 限られた医療を前提とした心身の健康の維持・増進を図る看護

B地域のように入院可能な医療施設が近隣にないなど、地域資源の少ない中山間地域において、入院が必要な病気を発症するなど心身の健康が阻害されることで遠方にある病院に入院することになり、家族介護者の負担や退院後の通院の負担等から、住み慣れた地域以外での生活や施設入所が余儀なくされると考えられる。そのため、C診療所看護師が[診察時患者の身体状況を把握する]ことを行っていたように《患者の心身の健康維持・増進》することが住み慣れた地域での生活を継続する条件となり得る。石橋(2019)は、中山間地域で暮らす要援護高齢者が「健康障害を引き起こすことにより在宅生活が困難になり医療機関や施設選択を余儀なくされている」と述べていることから中山間地域において高齢者が住み慣れた地域で生活できるよう心身の健康の維持・増進を図る看護が不可欠である

と考えられる。そして、心身の健康の維持・増進を図るために、看護師が全て主導で行うわけではなく、事例で『セルフケアに向けて症状出現時に血糖測定の提案』や『高血圧の原因探求のため食事内容やストレスに関する確認』などセルフケアの促進に取り組んだように、患者自身が自分の健康に責任を持って健康の維持・増進を図ることができるよう促すことが必要であると考えられる。そのため知識を提供し、意識を高め、セルフケア能力を高めていく必要がある。

また、診療所看護師は診療時間外であっても[身体状況や生活環境から受診の必要性を判断する]のように緊急性を判断し受診につなげ、[患者の損傷を予防し安全に受診できる環境を整える]のように患者が安全に帰宅できるよう送り届けるという看護活動を行っていた。B地域にはC診療所以外の医療機関がなく、また公共交通機関も十分ではないためであると考えられる。中山間地域における高齢者の住み慣れた地域での生活を支えるには、必要な時に必要な医療が受けられるよう必要時に受診できるよう調整する必要がある。また、医療機関への交通手段がなければ、高齢者が受診の必要性を感じても受診できない状況となり得る。そのため、必要に応じて受診ができるよう交通手段を確保する必要がある。

2) 今の生活を継続するため、生活や思いを反映させた看護

事例の看護活動では、『生活にセルフケアを取り入れるため血圧測定のための提案』をしたように、セルフケアが実践できるよう生活に組み込んだ。セルフケアの促進は健康の維持・増進を図る看護にも含まれるが、セルフケアを生活に組み込むことで無理なくセルフケアを継続できるようになる点に着目した。看護職者が生活状況を把握し、生活に合わせて支援することでセルフケアの継続を可能とすると考えられることから、中山間地域において高齢者が住み慣れた地域での生活を継続する看護と考えられる。

C診療所看護師は、「認知症患者の運転したい気持ちやこれまでの生活を踏まえ、どの程度運転できるのか確認し、今後の支援を検討するため帰り際に患者の運転状況を観察する」という看護活動を行っていた。中山間地域では公共交通機関に限りがあり、自動車が運転できなくなることで住み慣れた地域に住むことが困難となるケースも考えられる。患者の運転したい思いや自動車の運転が患者の人生に

深くかかわりがあること、生活を継続するには自家用車が必須であることも踏まえ、患者や家族にとって今後どのようにするとよいのかを考えていくためには、さらなる患者の思いや生活について情報収集する必要がある。以上から、中山間地域において住み慣れた地域での生活を継続する看護の実践のためには患者の思いやこれまでの生活・人生、現在の生活環境や地域の状況をも踏まえておく必要があるといえる。

3) 家族や地域住民の支え合いや地域全体を視野に入れた看護

事例の『地域住民とのかかわりを継続したい思いを叶えるため、近隣住民とのかかわり継続の支援』のように、患者は地域住民とのかかわりを持つことを望んでいた。吉野ら(1999)は、「中山間地域で生活をしている人々にとっては地域の人の助け合いは、なくてはならない生活の一部となっている」と述べており、中山間地域には地域の資源が少ないことから地域住民間で助け合う体制が自然と整えられており、地域住民とのかかわりを大切にしていると考えられる。それはただ単に住み慣れた地域での生活を継続することだけでなく、これまでに関係性を築いてきた近隣住民とのかかわりを持つことこそに意義があると考えられる。それは住み慣れた地域とは、これまで自分が時を過ごした人間関係を含めた環境であるといえるからである。そのため住み慣れた地域での生活には、地域住民とのかかわりが不可欠であると考えられる。事例の『地域住民とのかかわりを増やしたい思いを叶えるため、自身の体験などを近隣住民と共有する提案』は、患者に近隣住民とのかかわる機会を増やす提案を行ったが、直接地域住民らへ働きかけるまでには至らなかった。春山ら(2015)は、へき地診療所における看護活動の特徴に、地域住民同士のネットワークや支え合い、つながり、人間関係を把握することを挙げていることから、地域住民間のかかわりを継続し、増強することが重要であるといえ、患者を通して住民にかかわるだけでなく、時には直接地域住民らにかかわることも必要と考えられる。例えば互助の強化や、患者を通して地域全体に健康維持や介護予防等の知識を提供したり意識を啓発したりすることで地域全体の健康を維持することにつながる事が可能となる。それにより地域住民の住み慣れた地域での生活が継続されることも期待できる。中山間地域を含む、へき地の診療所で働く看護師の役割として高橋ら

(2015)は、住民が主体となって地域の健康課題に協働できるような環境をつくることの必要性を述べている。住民同士のかかわりを増強していく中で、ともに健康意識を高める等、地域における健康問題の解決に取り組む等支援するといった、地域全体の健康に向けて住民の結びつきを活かした看護を展開することが可能となる。

一方で、家族の支え合いにより、家族介護者の介護量の増大につながることも予測されるため、介護負担が軽減されるよう看護を実践する必要がある。畑山ら(2009)は、中山間地域の農村過疎地域において「高齢者は、住み慣れた地域での終末期を望んでいるにもかかわらず、医療機関の偏在により自分自身が受ける終末期医療は医師や家族の判断にゆだねる傾向にある」と述べており、保健・医療・福祉サービスの資源が充分でない中山間地域において要介護状態となったときに自宅での生活を営むには家族の介護負担が増大すると予測される。家族の負担感が持続、増強し、介護が困難となれば、社会資源の少ない中山間地域において、住み慣れた地域での生活を継続することが困難となり得る。そのため、診療所看護師が行っていた「家族の介護負担を軽減するため、外来診察後待合室にいる家族介護者に社会資源の活用に罪悪感を持たなくてよいことを伝える」のように家族介護者の介護負担の軽減を図る看護が必要である。

4) 地域の特徴や現在の体調を踏まえた意思決定を支援する看護

B地域では、[積雪による生活の影響を踏まえ利用者の生活方法とともに検討する]のように積雪により自宅での生活が困難となり、安心して安全に冬季を過ごすため、冬の間のみ介護老人保健施設への入所を検討する高齢者もいる。B地域は豪雪地帯でもあり、冬季には積雪により外出する機会が大幅に減る。そのような状況で地域住民間での集まりが減少することにより、筋力の低下や抑うつ状態、認知機能の低下等になることが予測できる。そのような状況を回避するためにも、その地域の季節等の特徴や環境も踏まえた生活場所の選択のような意思決定支援が重要であるといえる。

5) 長期的なかわりを前提として患者や家族との関係性を構築する看護

長期的なかわりを前提として患者や家族と関係性を構築するという、看護師と患者の関係性は中山間地域の特徴

と考えられる。事例では、『つらい思いを受け止め、いつでも話を聞くことを伝えた』のように相談しやすい関係性を形成していった。診療所看護師の看護活動の観察では、患者の話したい思いを尊重し、傾聴を重ねるという〔患者の満足感を満たす〕が含まれていた。患者が看護師に頼り思いを伝え、その思いに応じて看護師が実施することで患者は満足感を得る。その積み重ねにより患者は看護師を頼ってよいことを理解し看護師に信頼を寄せるのではないかと考える。中山間地域は医療機関も乏しく、他に受診できる環境ではないことから、信頼関係が崩れてしまった際には、他の医療機関に行くことができず、必要な治療を受けることができない状況に陥ることも考えられる。関係性を築き上げていくことで、患者や家族の生活状況や思いについての把握が容易になり、看護の展開につながると考えられることから、長期にわたるかかわりでもあるため、信頼関係は重要であると考えた。

6) 少ない資源を活用した効果的・効率的な看護

中山間地域に限らず様々な地域には身体的問題や社会的問題などを複合的に抱えた多くの人が生活しており、住み慣れた地域での生活を継続するためには、医療だけでなく、保健・医療・福祉・介護等が一体となってケアを提供することが求められている。そのため、多施設、多職種において連携を行う必要がある。中山間地域においては社会的資源が少ないからこそ限られた多施設・多職種との関係性が築けていることから、効果的・効率的に看護を提供することが可能である。診療所看護師の観察においても、限られた人的資源を有効に活用するため、〔スタッフ間で管理や患者に関する状況を共有する〕のように意図的に情報を密に共有したり、多職種カンファレンスにより幅広い視点から検討を重ねたりしていた。職種や協働のメンバーに限りのことから、いつも同じメンバーで対応するため、支援者間のつながりが強く、協力しやすいという強みの特徴としてある。協力しやすい関係性をメンバー間で構築しておくことも重要であると考えられる。そうした強みを活かし、関係性を形成しておくことにより患者が住み慣れた地域での生活を継続できるよう取り組みを実践していると捉えた。吉村(2015)は、中山間地域においては限られた人員、予算、条件の中で多職種による協働が重要であると述べているように、患者への効果や効率を考えながら住み慣れた地域での生活を継続するための看護や協働を検討していく

ことが重要であると考えられる。前述したように、住民同士の関係性が基盤にあるため、協働に民生委員などの住民を巻き込むことでさらに効果的に看護を展開することが可能となる。

謝辞

本研究にご協力いただきました、C診療所の患者様、職員の皆様に深く感謝申し上げます。

本研究は、平成26年度岐阜県立看護大学大学院看護学研究科の修士論文の一部に加筆し修正を加えたものである。

なお本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 春山早苗, 江角伸吾, 関山友子ほか. (2015). 我が国のへき地診療所における看護活動の特徴 - 2003年, 2008年, 2013年の比較から -. 日本ルーラルナース学会誌, 10, 1-13.
- 畑山峰, 人見裕江. (2009). 農村地域で暮らす高齢者が望む終末期医療提供についての検討. 臨床看護, 35(14), 2236-2242.
- 石橋文枝. (2019). 中山間地で暮らす要援護高齢者が「できる限り在宅生活を継続する」ための要件—第1報—島根県雲南市2地域の居宅介護支援専門員のインタビュー調査から. 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要, 79, 29-37.
- 川崎涼子, 矢野亜紀子, 緒方文子ほか. (2017). 中山間地域在住高齢者の在宅療養生活の継続の意向と実現可能性の認識. 日本公衆衛生学会総会抄録集, 76, 524.
- 厚生労働省. (2013). 地域包括ケアシステム. 2020-8-21. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/
- 高橋麻実, 水谷聖子, 星昌枝. (2015). 僻地の診療所で働く看護師の役割 - 他機関・他職種との連携・協働 -. 第45回日本看護学会論文集 在宅看護, 75-78.
- 吉村学. (2015). コミュニティの再構築を目指すごちやまぜ IPE 研修の試み. 日本在宅ケア学会誌, 18(2), 23-27.
- 吉野明子, 野嶋佐由美. (1999). 中山間地域で生活する人々の孤立感. 高知女子大学看護学会誌, 24(2), 39-47.

(受稿日 令和2年8月26日)

(採用日 令和3年1月25日)

Consideration of Nursing that Allows Older Adult Residents of Hilled Rural Areas to Continue Living in Their Accustomed Environment

Mariko Somiya ¹⁾ and Mitsuko Matsushita ²⁾

1) Management in Nursing, Gifu College of Nursing

2) Nursing Research and Collaboration Center, Gifu College of Nursing

Abstract

This study aimed to identify nursing characteristics that allow older adults to continue living in their accustomed environment in mountainous rural areas, through the result of the nursing practices for older patients of clinics, and observe the activities of nurses working in clinics.

Two couples (two men and two women) who reside in community B, town A, located in a hilled rural area, participated in this study.

All four individuals wished to continue living where they were accustomed to, in community B. Nursing care plans were formed under this premise. Nursing practice was based on these nursing care plans, consisting of “maintenance and promotion of patients’ mental and physical health,” “collecting data on the patient/family’s daily living conditions and thoughts,” “supports tailored to the patient/family’s daily life,” “care that supports the patient/family’s enjoyment and thoughts,” “continuation and reinforcement of residents interactions,” “the establishment of relationships with the patient/family,” and “alleviating the caregiving burden of the family caregiver.”

Observation of three nurses’ activities working at clinic C and confirmation of their meaning revealed the necessity of further support for their patients, such as “support for patient’s comfort,” “support for decision making,” “cooperation and collaboration with other occupations,” “effective utilization of scarce resources,” and “reliable medical assistance.”

The following should be needed to make it possible for elderly residents to continue to live in their accustomed environment: “nursing for maintenance and promotion of mental and physical health within limited medical facilities,” “nursing for supports tailored to the patient/family’s daily life and thoughts to continue current living,” “nursing for mutual support for family members and residents and with an eye on all parts of the community,” “nursing for decision-making support tailored to the characteristics of the community and patient’s physical conditions,” “nursing for the establishment of relationships with the patient/family in anticipation of long-term connection,” and “nursing for effective utilization of scarce resources.” By collaborating with the residents, it will be possible for older adults to live a life in their accustomed environment in hilled rural areas, with fun and purpose through interaction with others.

Key words: mountainous rural areas, older adults, accustomed environment, continuing living, nursing